

D—2 小児期の肥満に関する研究(第2報)

—別府市の3才児について—

別府大短大 本荘 延子

1. 最近肥満児の増加が社会的に大きな問題となっている。演者はまず、乳児期の肥満について調査研究し、昨年10月、本学会総会において発表した。その結果、乳児期の肥満は幼児期に近づくとつれ、はっきりと消失してゆくことがわかった。したがって、その後はじまる学童期以後の肥満と乳児期の肥満との結びつきを知りたいと思って、今回は、その中間の幼児期、その期間の中でもとくに問題とされている3才児の発育状態を調査検討し、その実態について多少の知見を得たのでこれを報告する。

2. 対象は前報と同様、昭和39年以降の別府保健所管内の3才児検診を受診した幼児で、Kaup指数20以上の者を肥満児とした。その数は、だいたい0.5%ではなはだ少なかった。これらの肥満児について、さらに詳細な調査を行なうと同時に、各年度別のKaup指数による発育状態についてめんみつな数理統計的検討を加えた。

3. 1) 3才児期の肥満児数がはなはだ少なく、乳児期に比較して激減している。

2) 正常児中最下位であるKaup指数15.0より16.0

未滿に属する幼児がもっとも多い。

3) Kaup 指数による発育状態の分布をみると、バラツキ、形状、ゆがみ、またとがりなどに、各年度ごとに面白い変化をみる。